

物部川流域の人々の川へのまなざしの変遷 に関する基礎的考察

三機工業(株) 小畑 博貴*¹
高知工科大学 渡邊 法美*²

By Hiroki OBATA and Tsunemi WATANABE

論文主旨 高知県を流れる物部川は、鮎釣りでも全国的に有名な清流であった。しかし、2006年には鮎の漁獲量は事実上ゼロとなるなど、河川環境問題は深刻化しつつある。鮎は、高知県の豊かな自然の象徴であるとともに、流域が水危機に直面しつつあることに警鐘を鳴らしている存在であるといえる。筆者らは、今後とも流域が流域らしくあり続けるためには、鮎を守り、川を守る必要があると考えている。これまで、物部川漁業協同組合が中心となって流域や行政をも巻きこんだ「物部川方式」と呼ばれる様々な環境保全活動が展開されてきた。しかし近年、物部川流域には、人々の懸命な努力をあざ笑うように、次々と「痛み」が発生し深刻化している。したがって今、さらなる「現状打破」への手がかかりを掴むことが求められている。そのためには、「流域の人々の関心はそもそも何故低いのか。関心が高い時代は存在したのか。その場合、それはいつから低下したのか」を探り、明らかにすることが有益であると考えられる。本稿は、まず、流域の人々と川との関わりが大きく変化したと思われる1950年頃から1970年頃に焦点を当て、聞き取り調査を中心にして、人々の川へのまなざしの変遷の一端を明らかにすることを試みる。次に、その調査結果に基づいて、問題解決の新しい手かかりを提案することを目的とする。

【キーワード】物部川流域, まなざし, 川づくり

1. はじめに

高知県を流れる物部川は、鮎釣りでも全国的に有名な清流であった。しかし、2006年には鮎の漁獲量は事実上ゼロとなるなど、河川環境問題は深刻化しつつある[1]。

鮎は、高知県の豊かな自然の象徴であると同時に、その漁獲量の減少を通して、流域が水危機に直面しつつあることに警鐘を鳴らしている存在であるといえる[2]。筆者らは、今後とも流域が流域らしくあり続けるためには、すなわち、人々が「守るべき」生活様式、文化、産業を守るためには、鮎を守り、川を守る必要があると考えている。

このような状況を打開するために、物部川漁業協同組合(以下、「物部川漁協」と略す)が中心とな

って流域や行政をも巻きこんだ「物部川方式」と呼ばれる様々な環境保全活動が展開されている[1]。

これらの活動を通じて、幅広い層の人々が流域環境問題を認識するようになり、各種のイベントへ参加するようになった。さらに、流域の人々の熱意は、県知事をも動かし、「物部川の明日を考えるチーム」という部局横断的組織を設立させた。物部川方式は一定以上の成果をあげてきたと考えられる。

しかし近年、物部川流域には、シカの食害による上流域の森林荒廃、上流域の大規模な土砂崩壊によって生じている濁水の長期化、慢性的な流量不足によって生じる瀬切れや河口閉塞の頻発など、人々の懸命な努力をあざ笑うように、次々と「痛み」が発生し深刻化している。今後、人々が物部川のそのような「痛み」に共感し、その共感が問題解決への大

¹ ファシリティシステム事業部 03-3216-8343 hiroki_obata@eng.sanki.co.jp

² マネジメント学部 0887-57-2408, watanabe.tsunemi@kochi-tech.ac.jp

きな力となることも期待される。しかし、現時点では痛みを共有しようとする人は急激には増加しておらず、各種イベントに参加する顔ぶれは固定化しつつあるのではないかと懸念されている。

今、痛みを共有する人をさらに増やすための手がかりを掴むことが求められている。

そのためには、「流域の人々の関心はそもそも何故低いのか。関心が高い時代は存在したのか。その場合、それはいつから低下したのか」を探り、明らかにすることは有益であると考えられる。

流域の人々の川との関係史の代表作の一つとして矢作川漁業協同組合が編纂した「環境漁協宣言」がある。ここでは、100年に亘る人々と川との関係史が詳述されている[3]。しかし、物部川流域については、そのような関係史は必ずしも十分に調査されていない。

そこで本稿は、まず、流域の人々と川との関わりが大きく変化したと思われる1950年頃から1970年頃に焦点を当て、聞き取り調査を中心にして、人々の川へのまなざしの変遷の一端を明らかにすることを試みる。次に、その調査結果に基づき、問題解決の新しい手がかりを提案することを目的とする。

次章では、まず物部川の概要を述べる。

2. 物部川の概要

物部川は、高知県東部の白髪山に源流を持つ全長約71kmの河川である。ここでは、物部川とその流域の特徴として、以下の四点を挙げる(図-1)。

第一に、物部川は、国が管理する一級河川の中でも有数の急勾配を持つと同時に、その流域は高知県最大の穀倉地帯である香長平野を持つ。ちなみに、河床勾配は、上流域は約1/40、中流域は約1/145、下流域は約1/280であり、灌漑面積は約3,500haである。

第二に、これらの背景のもとに、1950年代～1960年代にかけて、①電源開発②洪水調節③水利灌漑による土地改良事業、を目的とした物部川総合開発事業が実施された[4]。主な事業として、高知県が管理する三つのダムと三つの水力発電所(永瀬・吉野・杉田)と住友共同電力(株)が管理する三つの発電所(川口・五王堂・仙頭)が建設された。また、以前下流域にあった八つの堰も、統合堰と合同堰の二

つに統合された。前者については、1963年9号台風の災害復旧事業を機に下流の六堰が1966年に統合された。後者は、1967年に県営物部川土地改良事業として実施決定され、1973年に完成した。

第三に、物部川では、発電・農業・環境の三分野の水利用が競合しているが、環境分野における水利用の充足度が他の二分野と比較して著しく低い。発電に関しては、県が管理する三つの水力発電所において、2002年度の供給実績で、約55,000世帯の年間電力消費量に相当する電力が生み出されている。それらは四国電力(株)に売電され、その収入は工業団地の造成など流域の整備資金として活用されている。農業に関しては、川は灌漑期には毎秒15.5トンの農業用水を供給し、香長平野を潤してきた。これに対して、「流水の正常な機能を維持するために必要な流量」、いわゆる、「正常流量」はこれまで設定・確保されてこなかった。このため、アユなどの水中生物にとって、川の生息環境は近年極めて厳しいものとなっている。なお、平成19年3月に策定された物部川水系河川整備基本方針において初めて、「正常流量」について言及された[5]。現在、物部川水系河川整備計画が策定されており、正常流量を具体的に確保するための方法が明記されることへの期待が高まっている。

第四に、物部川は様々な問題に直面し続けている。それらは、水量の不足・瀬切れ・河口閉塞の頻発、山火事・ダムの影響等による濁水、冷水病の蔓延、農業・生活排水の放流による水質悪化など、枚挙に暇が無い。さらに近年は、シカの食害や濁水の長期



図-1 物部川流域の水利施設

(Google earth、国土庁土地局「四国南部地域主要水系調査書」1996に基づいて作成)

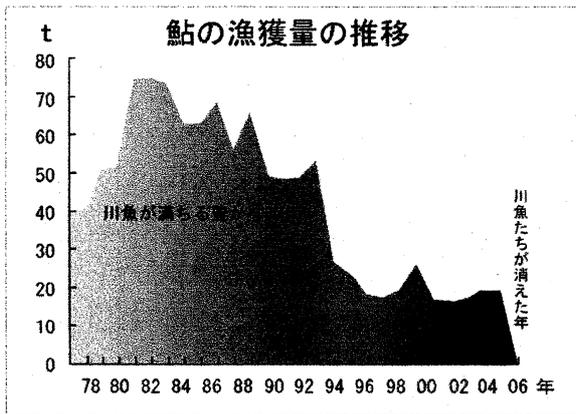


図-2 物部川の鮎の漁獲量の推移[1]

化も深刻化している。かつて「アユ満つる川」と形容された清流は、2006年には鮎の漁獲量は事実上ゼロとなった(図-2)。物部川は、「試練」を受け続けている川なのである。

3. 1950年頃の生活に関する予備調査

1950年頃の生活に関する予備調査として、2007年12月に物部川漁業協同組合楠目専務(当時)から、1950年頃の人々の水との関わり方についての話と、過去から見た現状への想いを伺うことができた。以下に聞き取りの中で判明した1950年頃(戦後)の生活をまとめる。

(1) 食事

食事において川の生物というものが非常に大きな役割を担っていた。鮎にはじまり、鰻、テナガエビ、サエビ、ヌマエビ、シジミ貝にいたるまで、多種多様な水生生物が住む物部川では、当時の人々にとって動物性のタンパク源として重宝されていた。またそれは、チラシ寿司に混ぜてそのまま食したり、湯がいて干して保存していた。当時は食糧保存機器が普及しておらず、クーラーボックスといったものもなかったため、海魚は長期保存として塩漬けにするか、干物にしてのみ流通されていた。楠目氏の次の言葉は印象的であった。「ゴリとか3月ごろ、ヨモギゴリっていう魚がおって、ヨモギが生えるころ、まっ黄色の卵をもった3cmくらいのゴリが、ししゃものミニサイズのようなものがおって、その卵がプシロの中ではじめて、なんともいえないプリプリ感があって、子供のときからそんなもんを見て、食べて…。もう生活の一部やったわけよ。」物部川流域の人にとって、川魚は身近な存在であった。ま

た、川の水自体も現在とは比べようもないほどに綺麗で子供時代に川の水を飲む事に抵抗はなかった。

(2) 食器洗い・洗濯・入浴

現在のように上水道が整備されている時代ではなかったため、食事などで利用された食器などはすべて川の水を使って洗う習慣があった。また、洗濯をする場合も物部川の水を利用して洗濯を行っていた。当時洗濯機などの電化製品はなかった。お風呂に入るにも物部川の水は欠かせない。物部川の水を汲んでお風呂に利用していた。水を汲んでくるのは子供の手伝い事のひとつであった。

(3) 娯楽

夏は学校にプールもなかったため、子供はみんな川へ行った。川は先輩後輩が集まる場所であった。そのため川が、先輩に対する礼儀を教えてくれる場所でもあった。また、先輩は後輩に対して、川の恐ろしさや、チャンドッポウ、カナツキと呼ばれる道具を用いて魚を捕る川での遊び方を教えてくれた。こういった習慣が川にあり、「先輩は後輩を可愛がり、後輩は先輩を慕う」という良い意味での縦のつながりができていた。娯楽生活の中で、子供たちは川に親しみ、川での体験を積み重ねたのであろう。物部川のことを主川(おもがわ)と呼び、急流河川であったため、小学校低学年時にはまずは支流の舟入川などの流れの緩やかな川で練習をする。泳ぎが達者になってくると、先輩が「主川に行くか」と声をかけ、後輩を連れていった。

(4) 過去の生活のまとめ

物部川の川魚が食べるために必要不可欠なものであったこと、食器洗い、洗濯、お風呂といった消費生活の中での水利用に対して、物部川の水が利用されていたこと、そして子供時代の娯楽が川なくして語れないという点が伺える。人々が川に愛着を持ち、物部川が生活の中の一部であった1950年頃は、まさに人々のまなざしは川に注がれていた時代であったといえる。

4. 調査研究方法

今回の調査は、日本の産業形態が大きく変化したと考えられる戦後(1950年頃)から1970年代に焦点を当てる。物部川上流域については物部町(旧物部村)の人々を対象とし、下流域については土佐山田

町の人々を対象として、それぞれの人々のまなざしの変遷を調査する。

はじめに、上流域と下流域における歴史的史実の概要を把握するために、1950年から1970年までの日本での出来事、高知県内の出来事、物部村、土佐山田町での出来事を記載した簡易な歴史年表を作成した。農業者、林業者、漁業者に対する聞き取り調査は、この年表を用いて行った。それぞれの方に、年表の時間軸に沿って、過去の消費生活と生産生活を伺った。具体的には、

- ・ 1950年（戦後）の消費生活の実態
 - ・ 各時代の消費生活における水利用の特徴
 - ・ 漁業者、林業者、農業者の水利用の変遷
 - ・ 現在の物部川の取り組みに対しての意見
 - ・ 現状の不安
- などを伺った。

次に、史実を文献調査し、聞き取り調査結果の妥当性を確認しながら調査を進めた。最後に、聞き取り調査の結果を基に、問題解決の新しい手がかりを提案した。

聞き取り調査の対象者は、林業者は物部森林組合から、農業者は山田堰井筋土地改良区から、漁業者は物部川漁協から、それぞれご紹介頂いた。実際に聞き取り調査をさせて頂いた方々は

- ・ 物部村久保沼井地区 元林業従事者（79歳）
- ・ 物部村別府峡地区 元林業従事者（79歳）
- ・ 土佐山田町下ノ村地区 山田堰井筋土地改良区組合員（73歳）
- ・ 香南市野市町地区 物部川漁協組合員（62歳）
- ・ 土佐山田町地区 物部川漁協組合員（58歳）
- ・ 土佐山田地区 物部川漁協専務（70歳）

また、一般住民として、

- ・ 物部村庄谷相生まれ、現在大津在住（68歳）
- ・ 土佐山田町在住 大学生（21歳）
- ・ 香美市教育委員会物部分室 分室長（47歳）
- ・ 物部町在住者 2名

の方々に聞き取り調査を行った。

5. 物部川流域の消費生活の変遷

(1) 消費生活（流域全体として）

1950年の農業者、漁業者、林業者、一般住民の消費生活では、水との関わりにおいては同様のことが

いえた。生活の分類でみると、生理的生活の中では、食事、入浴で川の水が利用されており、家事的生活時間の中では炊事、洗濯で利用されており、社会的文化的な生活の中では運動（泳ぐ）、子供たちの教養娯楽、レクリエーション（釣り）で利用されていた。つまり、消費生活の中で水を利用すると考えられるもの全てで、川の水が利用されていたことがわかった。これらの川の水を利用した生活は物部川漁協専務からお聞きした内容とほぼ一致することであった。以下にそれぞれの詳細をまとめる。

a) 食事

当時は、食料保存機器などが乏しく、スーパーマーケットなどの多種多様な食材が販売される商業施設がない物流施設が「不十分」な時代であった。このため、主に身近に得ることができる川魚から動物性たんぱく質を摂取した。牛肉、豚肉は、特に食べ物として利用されていなかった。流域の人々にとって、川魚が必要不可欠なものであったと考えられる。

b) 入浴、炊事、洗濯

上水道の整備がされていなかったため、各家庭は川の水をくみ上げて風呂を貯め、入浴した。子供たちは学校が終わるとバケツを手にとり、川の水を汲み取りお風呂に流し込むことを毎日行っていた。また、炊事においては川の水を利用して食器を洗い、煮物などの料理には川の水や地下水を利用していた。洗濯は、各家庭で洗濯板を利用し、川で行っていた。

c) 娯楽

戦後まもなくは娯楽が非常に乏しい時代であったため、川が身近な遊び場であった。魚釣りをしたり、チャンデッポウ、カナツキと呼ばれる道具を用いて魚を捕ることが遊びのひとつであった。また、現在のようにプール施設が小学校と中学校にはなかったことから、「泳ぐ」ことは川で泳ぐことを意味した。上流域下流域ともに、夏には大勢の子供たちが川へ行き水遊びを楽しむ時代であった。

d) 考察

上流域と下流域における消費生活には共通する部分が多く存在した。ただし、両地域で異なるものも存在した。それは飲み水の取得方法や水に対するルールである。水との関わりにおいても、両地域では異なる変遷形態を辿った。次にそれぞれの水利用に対する関わり方とその変遷を述べる。

(2) 上流域の人々の水との関り方

上流域の水利用に関しては、物部川の水を直接利用する点もあるが、大多数の家屋が物部川よりも高い場所に位置するため、物部川へ流れ入る原水（谷水）を利用してのことから、川へと続く小さい谷が生活を支えていたといえる。谷水は集落で利用するものもあれば、各家庭がそれぞれに取水するものもある。取水方法は、谷から流れ出る水を、竹を割って節を抜いたものをつなぎ合わせたものに流すことで、各家庭、集落にまで水を引いてきていた。（例えるならば、そうめん流しの要領である。）

各集落により取水する場所は異なるが、今回ヒアリングをおこなった久保沼井地区では、海拔 500m～600m のところから水を引いている。集落で利用する谷水は、農業の灌漑用水として利用され、各家庭へ引かれる谷水は、生活の中で必要な水として利用されていた。以下に、上に記した食事、入浴、炊事、洗濯、娯楽についてそれぞれ説明する。

a) 食事

上流域の人々は、長い間きびしい自然の懷に抱かれ、食糧は自給自足が当然であり、山の斜面を伐り開いて水のある所には水田をつくり、その他の土地は畑として利用する山村特有の生き方を実践していた。食料品店は少なかったため、山の穀物が主食とされ、川魚が上流域の人々にとって貴重なタンパク源であった。そのため、川魚を調達するために子供だけでなく、大人も川へ足を運び、その日に必要な分の川魚を調達しては家庭に持ち帰り、おかずとして食した。当時の川には川魚は溢れていたが、自分達の貴重な食糧という認識が高く、必要以上の捕獲はしなかった。また、飲み水、煮物などの調理用の水として谷水が利用されていた。

b) 入浴、炊事、洗濯

入浴時の水は、家屋の立地場所により、谷水を利用する家庭もあれば物部川の水を利用する家庭もあった。しかし川の水を必要としていたことには変わりはない。炊事では、ご飯を炊き、野菜を洗い、食器を洗う場合には谷水が利用された。洗濯の場合には物部川の水が利用された。金だらいに洗濯物と洗濯板を入れ、水量が豊富に流れるところで洗濯石鹸を利用し、洗濯板で擦り洗いや足で踏み洗いをおこなっていた。水量が豊富であったことから、汚れが

目立つことはなかった。

c) 娯楽

娯楽は川遊びと山遊びが中心であり、子供たちは裸足で山川を駆け回り、各集落の前に流れる川で泳いだり魚をとったりしていた。小学校のころに水泳大会が開かれたが、会場はプールではなく、神池地区にある池であった。

d) まとめ

以上のように、上流域では谷水は飲み水や調理用水や入浴、炊事に利用され、物部川は食事のおかずの供給場所であり、入浴、洗濯、娯楽としても利用されていた。谷水も物部川も生活の中に非常に密着しており、上流域の人々は水を意識せざるをえない状態であったともいえる。特に谷水に対しては竹を用いた流水設備であったため、大雨や台風などで、竹と竹の隙間にゴミ（落ち葉や枝木など）が詰まることが多々あり、その度に人々は「水を迎えに行く」と言い、山を登り、ゴミが詰まっている箇所を補修をおこなった。また、竹であるため破損することが多く、維持管理には大変な労力が必要であった。そのため人々は毎日谷水に関しては細心の注意を払っていた。

(3) 上流域の人々の消費生活の変遷

日本社会は戦後の急速な経済成長と共に大きな成長と変化を遂げた。そのことは上流域の物部村にも多大な影響を与えることとなった。中でも 1950 年代の物部川総合開発事業によるダム、発電所の建設は上流域の人々の生活を大きく揺り動かすことになる。発電所の建設に伴い、集落よりもさらに上流にて発電のための取水が行われたため、発電対象区間の集落では、豊富に流れる水が愕然と減ることになった。そのため、貴重なタンパク源であった川魚は激減し、それらの捕獲が難しい状況となった。さらに、河川は子供たちの泳ぐ場所としても利用されていたが、水量の減少により泳ぐことはできなくなった。

これらの代わりに、発電所建設事業からの補償として、竹を使った取水設備に変わり、エスロンパイプ（硬質塩化ビニル管）による取水設備が整備され、子供たちの泳ぐ場所として、各小学校においてプールが建設された。

また、これらの補償時期と重なる 1950 年代後半には、家電製品（洗濯機、冷蔵庫など）が普及し始め、

大規模な道路整備が行われ、1960年代にはカラーテレビや自家用車が普及した。

竹を使った取水方法からエスロンパイプを通した取水方法に変わったことによって、人々の谷水の維持管理は格段に楽になった。ただし、炊事や入浴に関してもパイプを通した水が利用されるようになると、以前のように維持管理に労力をそそがねばならないというようなこともなく、毎日流水を意識する必要はなくなった。

川魚の減少は、タンパク源の減少として一時期問題とされたが、すぐに冷蔵庫の普及と交通事情の改善により食糧の保存や確保が可能となったため、問題視されなくなった。川の水量が激減し、プールが建設されたことで子供たちの川遊びはプール遊びへと移行し、娯楽は川から遠のくことになる。それに「追い討ちをかけるように」カラーテレビや自家用車の普及による娯楽の多様化が、さらに人々を川から遠ざけることになった。川遊びや山遊びをする子供たちは減少していったと考えられる。

(4) 下流域の人々の水との関わり方

下流域の水利用に関しては、二つに分けることができる。上流域と同様に物部川よりも高い場所に位置する場合と物部川よりも低い場所に位置する場合である。高い場所に位置する場合は、上流域同様、谷水を用いることとなるので、ここでは、物部川よりも低い場所に位置する場合（以降下流域と呼ぶ）について述べる。

下流域では、物部川の水と物部川の伏流水でもある地下水が用いられていた。地下水については、各家庭に井戸がなかったため、各集落の中で共同井戸が主な取水設備として利用されていた。さらに、下流域では“水の使い分け”がされていた。「用水」と「悪水」と呼ばれる使い分けである。「用水」とは物部川から入ってきている水が取水口から流れる中で一度も田んぼや生活雑排水が混入していない水路のことを指す。この水路は綺麗な水として、汚れ物などを洗うことは禁止されていた。「悪水」とは逆に、水路上で田んぼを通した後の捨て水が流れ、途中で生活雑排水などが混入した水路のことを指す。

この水路は基本的に集落よりも一段低い場所を流れており、ここでは汚れ物などを洗うことが許可されていた。このルールは古来より決められた集落に

よる慣例として、集落に住む以上守らなければならないものである。次に食事、入浴、炊事、洗濯において、これらのルールも踏まえながら説明する。

a) 食事

下流域の人々にとって飲み水は集落内にある共同井戸の水であった。共同井戸ですくい上げた水を桶にいれ、家庭にある水瓶に貯め込んでおく。これを飲み水や調理用の水として用いた。川魚は、上流域同様に下流域の人々にとっても貴重なタンパク源であったため、捕獲においても上流域と同様のことがなされていた。

b) 入浴、炊事、洗濯

入浴の水は物部川の水が利用され、川の水をバケツに汲み、それを数度往復する。この水汲みは子供の仕事であり、各家庭の子供たちは毎日のお風呂の水を満たす係であった。入浴後の水処理は容易に流すことはできず、一度使われた水ということで、悪水に流されていた。炊事では、米や野菜を洗う水は自分達が食するものであるため、一度も汚い水が混入されていない用水が利用された。食器などを洗う場合は各家庭にハシリと呼ばれる池があり、ここで洗われる習慣があった。ハシリには鯉が飼われており、ご飯の残りなどについては鯉のエサとして処理されていた。洗濯については当然汚れ物であるため悪水でおこなわれた。

c) 娯楽

娯楽は下流域では川遊びが主であり、夏になると、スイカや桃を持った低学年から高学年が列をなして山田堰を訪れ、子供が溢れ賑わいだ。川には川魚が溢れ、水中眼鏡で覗くと鮎が目の前を数匹泳ぐ姿がうかがえた。急流河川であったが、子供たちは安全に泳ぐことができた。なぜなら、山田堰には子供たちの安全を見守るボランティアの監視員がおり、準備体操から遊泳指導に亘ってしっかりと管理されていたからである。小さい子供たちにとって、監視員がいる山田堰は安全な「プール」であったといえる。

d) まとめ

下流域の水利用に関してまとめると、下流域では物部川の地下水を集落の共同井戸というかたちで取水し、それを飲み水、調理用水として用いていた。入浴に関しては物部川からの水を直接汲み上げ、利用後は悪水に流す。炊事においては食す前のものに

関しては用水を用い、洗いのものに関しては悪水を用いる。同様に洗濯においても悪水が用いられる。これらのルールは、各集落に昔から存在する慣例の一部であった。娯楽については、子供たちのための安全な“プール施設”が整っていた。下流域の人々の消費生活も上流域の人々と同じく、生活が川に密着しているものであり、飲み水などを除けば、川の水を使っていることが視覚的に伝わっている生活であったといえる。

(5) 下流域の人々の消費生活の変遷

太平洋戦争と南海地震により、高知市、中村市は多大なる被害を受けた。そのような状況下において、土佐山田町は無災害都市としては県下で唯一指定を受け、早々に都市計画による区画整備が行われることとなる。そして高知県の陸の東玄関としての重要性を国からも認められ、町の産業構造は急速に発展した[6]。これに伴う水需要の増大は当然の結果であった。よって早急な上水道の整備が必要とされ、戦後より上水道、簡易水道が着々と整備されていった。

これにより人々の水利用形態は大きく変わることになる。飲み水、調理用水については、集落で共同井戸を利用し家庭に運ばれていた水が、水道をひねることでいくらかでも各家庭に流れるようになった。入浴や炊事においても水道が利用されるようになった。食生活や洗濯、娯楽については上流域と同様であった。洗濯機の普及により、悪水を直接利用した洗濯ではなくなった。交通施設整備や娯楽の多様化が、子供たちの川離れの要因となった。冷蔵庫の普及も、川魚中心の食生活から多種多様な食生活への変化を後押ししたと考えられた。

下流域では水需要の増大が激しく、主に地下水を水源とする上水道整備が急激に進んだことが、水との関わり方を変えてしまった大きな要因であったと考えられる。一方で、ダムや発電所建設による影響は少なかった。

食生活は川魚中心から多種多様な食生活に変化した。ただし、川魚が激減したということはなく、ダム建設当初は水量も比較的变化がなかったため、上流域に比べると川遊びの期間が長かったといえる。これはダム、発電所建設による補償によるプール建設がなかったため、上流域に比べて下流域ではプール整備が遅れたことも理由のひとつであったと考え

られる。

(6) 消費生活の変遷のまとめ

以上のように、1950年(戦後)において、生活の中に必要な水が川と大きく関わりを持っていた。業種に関係することなく、流域の人々の川へのまなごしは非常に高かったといえる。しかし、1970年代までに利水環境が整備され、家電製品が普及し、娯楽が多様化したことで、人々の川に対するまなごしは極めて薄いものとなったように思われる。わずか20年ほどであるが、人々のまなごしを川から遠ざける要因が集中して発生したことが、人々のまなごしを徐々にではなく、一気に変えることとなった。

6. 物部川流域の生産生活の変遷

(1) 上流域の林業と農業の変遷

戦時中、戦後の急速な木材需要の増大が起きるまで、上流域林業全般において、人々は用材などに適した木を選んで切り、その跡に後継樹を育てるなどして、森林の更新を図るといった卓抜林業が行われていた。しかし戦後は空襲で家屋が焼かれたこと等から材木需要が高まり、対象とする区域の樹木を全て伐採し、収穫するといった皆伐林業が行われ始めた。皆伐林業が始まると、上流域では以下の流れで林業が営まれた。

- ① 山林を皆伐する
- ② その時切り落とされた葉や枝が乾燥し枯れた後、火をつけてその土地を焼畑する
- ③ 焼畑によって土地が肥えて何年間か畑として利用できるようになるため、穀物を植える
- ④ 数年後、土地が痩せてくると農作物が育たなくなるので、次に和紙の原料となる三桧(みつまた)を植える
- ⑤ その後その三桧の間に植林をおこなう
- ⑥ 植林した木が育つ頃には三桧は切る
- ⑦ その後植林した木が育ち、それを皆伐する(①にもどる)

上流域では山地を林地のみならず、皆伐後に農地としても利用していた。しかしながら上流域の山林所有者については、5ha未満の山林所有者が七割を超えていた。つまり林業としては個人の持つ山林面積の零細から、林業のみでの生活というものは厳しい現状であった。そこでは、皆伐後に行う農業が人々

の収入生活の要になるわけであるが、農業においても悪条件が整っていた。

日本社会全体では、1950年代以降は農業においては耕作機などの普及により、農業生産の効率性が高まった時期であった。しかし、上流域の農地は、山の斜面であったため、農機具などを十分に導入することができなかった。

以上のことから、日本社会の木材界は好景気に沸いた時も、上流域の大半の人々は所有山林面積が小さかったため、林業からは豊かで安定した収入は得ることができなかった。同時に行われていた農業においても、山間部特有の悪条件から十分な利益を収めることができない状況であった。

そのような状況下で、山村社会においても貨幣経済が浸透していった。これにより上流域物部村では、1人、2人と次第に離農・離村する人が出現した。その結果、消滅した集落もあった。

この離農・離村の続出は、深刻な水管理問題を招いた。それは、集落内での水の維持管理労力の不足である。上流域における水の維持管理は、集落の人々が定期的に水路や導流パイプを整備することによって実施されていた。管理できる人が、ある一定数存在するという前提で成り立っていたといえる。しかし上流域での人口減少に伴い、維持管理が困難な状況が発生した。上流では、人口減少が水施設の維持管理を困難とし、それがさらなる人口減少を生むという悪循環が多発した。

自分の利益を図るための行動が他人に何らかの悪影響を与えてしまう現象は、「社会的ジレンマ」と呼ばれる。上流域で発生しているこの現象は、社会的ジレンマと捉えることができる。また、深刻な過疎による高齢化のため、たとえ数の上では人手を満たしている集落においても、維持管理をすることができない集落というものも存在している。

(2) 下流域の農業の変遷

下流域の人々は古来より物部川の水を利用することによって農業を営んできた。しかしその農業は、戦前まで古くからの封建的制度が顕在化しており、地主と小作人という関係が存在した。地主は小作人に土地を貸し与え、小作人はその土地を利用して米を作り、地主に一定量を献上することで関係が成り立っていた、とのことである。そのため、小作人に

とっての物部川の水というものは非常に大きなものであり、自分達が生きていくために必要なものであった。干ばつが起きようものなら、下流域では上集落と下集落間での水争いというものが絶えず起きていた。昭和初期における大干ばつ時においては、山田堰より取水された水を利用する農業者と山田堰よりも下流の堰からの水を必要とする農業者間での大紛争が起こり、高知県中の警察が集まり監視体制をとるという異例な事態を招いたこともあったそうである。

下流域の農業者は、こういった歴史的な苦悩の日々から脱却すべく、安定した水というものを求め続けていた。いわば水が十分に流れてこないということが生活の中での不安要素の大部分を占めていたともいえる。しかしながら、1950年代の物部川総合開発事業によるダム建設により、農業者が毎秒15.5トンという安定した水量が確保されるようになると、水争いは消え、農業者の水に対する不安も緩和されていった。

このことは同時に、川に対するまなざしも薄れていったことを意味するように思われる。ダム建設後に生まれてきた現在の農業者は水不足を経験したことがなく、農業に必要な水は「有って当然」という意識を持っているようにも思われる。第二章で述べたように、物部川では、農業・発電・環境の三分野において水利用が競合している。ダム建設前の苦悩を味わっている現在の高齢の農業者からすれば、ようやく手にした安定した量の水を、何故農業者以外と分け合う必要があるのか、と考える人も少なくないように思われた。

a) 下流域の農業における田役

農業者が農業を行っていくうえで、農地はもとより、農道や水路は必要不可欠なものである。これらの維持管理は田役と呼ばれる。古くから、集落内の灌漑用水路、近辺の堤防の草刈や農道の整備を集落内の人々が行ってきた。

維持管理に発生した費用については、集落内の農地総面積あたりの各個人が持つ農地の割合により、農業者一人の負担が決定される。例えば、A氏の農地面積が集落全体の10%であれば、A氏は集落全体の田役費用の10%を負担する必要があるということである。当時は流域集落のほとんどが農業者であ

ったため、田役自体が成立していたと思われる。

しかし現在、戦後の職業の自由化の影響や農家の収入不足により、農業者の離農が深刻化し、その結果、田役を十分に行うことができない状況になりつつあるとのことである。集落内の農業者が減少しても、集落にある水路や農道は減るわけではないため、田役における個人負担金額が増大したのである。離農が急増した集落においては維持管理ができず、残された農業者は自分の田畑周りのみ管理をする状況となっているそうである。「上の」集落で十分な田役が行われなくなれば、水路上つながりのある「下の」集落にも影響を与える。すなわちこの場合、下集落の人々は、上集落の田役の費用も負担する必要が生じることになる。

下流域においても、離農－水施設維持管理困難化－さらなる離農、という上流域と同様な悪循環と社会的ジレンマが発生している。農業では、生計を維持できない場合もある。

(3) 内水面漁業の変遷

a) 変遷の概要

物部川漁業協同組合は1950年に設立された。流域の人々の認識として、当時の物部川漁協に関しては特に目立った動きもなく、有名無実であったという声もあった。しかし、1950年代の物部川総合開発計画の実施によって、河川生態系に悪影響を与えたということから、組合に漁業被害補償が入ると、組合活動が活発化することになる。これにより、鮎などの川魚の放流事業が開始された。

当時の流域の人々（主に子供たち）は、チャンデッポウやカナツキを手を持ち、生きるために貴重なタンパク源としての魚を捕まえていた時代であった。しかし、放流事業の開始時期から、冷蔵庫の普及に伴う食生活の変化と相まって、人々の意識は大きく変わることになった。人々は、自分達の貴重な食糧確保のためには必要以上の捕獲はしないという認識から、「放流されているのだから、いくらでも捕ればいい」という認識へと変わってきて、1日にバケツ何杯分も魚をとる結果となった。魚を捕るということが、生きるためから、レクリエーションに変わってしまったのである。

これに対して、物部川漁協は厳しく規制を強化し、監視員も河川流域に配置し、乱獲を防ぐこととした。

また、チャンデッポウやカナツキといった道具の使用も禁止した。これは、先人の知恵であった漁業文化の「衰退」を意味したように思われる。

さらに漁協は、規制強化の中で漁協組合員以外による漁獲を禁止した。このことによって、子供達は川魚を捕まえることができない状況になった。これは当時の子供達の川に対しての関心を奪ってしまう結果となった。子供のすることであるために暗黙の「了解」があったのではないかという疑問が生じたため、念のために、二人の方にこの件について再確認した。その結果、役場の職員の子供や漁協組合員の子供でさえ、知らずに川で魚を捕っているときに、漁協の監視員が現れ、ものすごい剣幕で罵声を浴びせたので、家に帰ると子供が怯えて泣いていたという事例を双方から伺った。したがって、このような事例は相当数あったものと考えられる。

また、第二章で述べたように、物部川下流域には以前八つの堰があった。それらが二つに統合された際に、古い堰を取り壊すという話が持ち上がった。子供たちの安全なプールでもあった山田堰に関しては、当時ボランティアで監視員をされていた人が子供たちのために残していきたいと強く反対運動を起こしたのだが、残念ながら取り壊される結果となってしまった。ここで、物部川漁協の対応がヒアリングをおこなった人の記憶にはっきり残っており、ボランティアの人による反対運動をサポートすることもなく、一切干渉しなかったという事実がわかった。

b) 物部川漁業協同組合に対する不信

物部川漁業協同組合という言葉聞いて、ヒアリングの中で頻りに聞こえてきたキーワードがある。それは、「漁協は補償金をもらっている」という言葉である。その真意は、「本来、漁協は河川を守る立場にあり、補償金もそのためにもらっているのではないか。しかし実際の物部川漁協の活動は、そうではなかった可能性がある。」にあるように思われる。物部川漁協への期待と現実との乖離が、流域の人々に不信の念を抱かせてしまったと考えられる。

厳しい漁獲規制と監視を経験した現在の50歳以下の人の中には、不運にして子供の時代に物部川漁協に対する不信の念を刻み込んでしまった人も少なくないように思われる。また、流域の中で漁協の行動を見てきた中で、不信を持つ人もいると思われる。

c) 冷静な過去の理解と素直な現在の評価の必要性

ただし筆者は、漁協の過去の行動を冷静に理解し、現在の活動を素直に見る必要もあると考える。

まず、冷静な過去理解の必要性について述べる。

芝村は、補償金について、「ダム建設などの河川環境に与える影響が不可逆かつ、累積的であることを考えるならば、河川漁業の再生産性を保証するものではなく、むしろ巨額な一時金によって諦めを誘導するような仕組みとなっている。」と解釈する。その上で芝村は、内水面漁業に与えられる第五種共同漁業権は、「漁業制度から、「川のある生活」を否定したものだといえる。」と結論づけている[3]。

補償金の受け取りと山田堰取り壊しに対する無干渉などの物部川漁協の過去の行動は、河川における内水面漁協の不明確な位置づけが一因となっていることを理解するべきであると考えられる。

次に、素直な現在評価の必要性について述べる。

物部川の鮎の漁獲高は、第二章の図-2 で示したように段階的に激しく減少していった。そこで、物部川漁協は、1991年に活動方針の大転換を図る。世間の認知を受けて川魚の安定化という正業で稼ぐこと、正業には流域全体の支援を受けた河川環境保全が不可欠であることを認識すること、川と川魚は流域の共通財産と位置づけること、漁協は環境保全活動の牽引車の役割をつとめること、がその骨子である。

物部川漁協は、「河川環境悪化→補償金獲得→放流」という「ビジネスモデル」の限界を悟り、川魚の安定化という正業の実践を目指し、冷水病に強い天然鮎を増やす行動を選択していった。そのためには、山川里海の人々が連携して、豊かな河川環境を創り出す必要があった。一民間組織にすぎない物部川漁協が、無謀にも、豊かな河川環境創造という公益実現のため、流域の「社会システム」構築に挑んでいったのである。その勇気が、物部川方式の展開を生み出し、流域の人々の心を少しずつ動かしてきたのである。過去とは一線を画した漁協の勇気を、素直な気持ちで見ることが必要であると考えられる。

7. 河川環境問題解決のための一提案

(1) 川の恩恵・歴史を知らせる

筆者は、今回の一連の聞き取り調査を通して、現

在の川の利用方法、川の色、魚の生息状況、さらには、水道をひねれば水が出るのが当たり前であるという感覚を持つてはいけないことを実感した。これらは、漁業者や農業者の中でも「叫ばれて」いたことである。1950年、或いはそれ以前の物部川は、川魚も豊富であり、水量に恵まれ、川は澄み渡っていた。しかし、それは流域の個人個人が川の恩恵を受けていることを認識しており、川の水や山林の水が十分に管理されていたためでもある。

筆者らは、「過去の生活の中で人々は水とどう関わっていたのか、それが月日の流れとともに消えていき、その結果何がどう変化してきたのか」を多くの人々に知って欲しいと考える。さらに私たちは、消費生活の変遷だけでなく、農業や林業などの産業における水利用・水管理の変遷も理解する必要があると考える。

そう考える理由は、以下の聞き取り調査のお言葉の中にある。「前にPTAが子供を連れてきて、ゴミを捨てていったことがあった。だからやかましく怒ったらよ、次からはゴミを拾いだしてね。でもそのとき、「おじさんが怒っているからゴミを拾いましょうね」というふうに言うていた。僕はびっくりしたよ。今の現実だけで満足して、歴史を知らない。そういうふうなことになってもらったら困るなあと思うね。歴史も学んでもらって、ここだけじゃなくて、他の川も見てもらって、汚い川もある。そういうことを見て、きれいな川がどうして汚くなったのかということを考えてほしい。」

物部川流域の人々は、水を育む豊かな自然環境の懷に抱かれて生きてきた。私たちにはその懷を守る義務がある。

(2) 農業者支援ネットワーク

第六章二節でも述べたとおり、下流域の農業の現状は厳しい。このことが、農業者が総体的に河川環境問題に目を向ける心のゆとりを十分に持つことができない一因になっていると思われる。

筆者らは、将来的には「農業者支援ネットワーク」が必要であると考え。これを実現する一つの手段として、農林水産省が平成19年度より開始した「農地・水・環境保全向上対策」がある。これは、田役などの地域の農地・農業用水等の資源の適切な保全管理に対して、自治体や周辺団体をまとめ、組

織化する営農活動に対して助成金を公布するものである。ここでの要件は、助成支援とともに横のつながりを生み出すネットワークづくりにある。これによって、農業施設の適切な保全管理や長寿命化を図り、さらに農村の生態系保全や景観形成などの効果が生まれることが期待されている。

ある水路では、2008年3月に行われた川干（農業用水路の清掃）では、廃棄されているペットボトルや空き缶が大量に見つかり、それらの分別作業を5人の専門業者の方々に実施したにもかかわらず数日もかかったとのことである。一般住民がこのネットワークに参画するようになれば、このような「心無い」行為を未然に防止する効果も期待される。

(3) 物部川漁業協同組合の広報活動の拡大

第六章三節で述べた「物部川漁協＝補償金」という「公式」を、流域住民に見直してもらう必要がある。ここで漁協の広報活動の拡大を提案する。

現在物部川漁協からは、「広報ものべ川」と呼ばれる広報誌が年に一度発行されている。広報誌の中には、収支決算、事業計画、現在の取り組み、思いなど広報誌として十分な内容が盛り込まれている。

しかし、この読者数が少ない点が問題である。広報誌は主に物部川漁協組合員と遊漁者にしか配られていない。2006年では組合員490人、遊漁者375人といった非常に小規模な広報となっている。

その他の広報媒体としては「物部川漁業協同組合ホームページ」がある。これは定期的に更新されており、現在の物部川漁業協同組合としての気持ちが熱く記載されている。しかし、上流域をはじめ流域全体が少子高齢化する中で、ITを用いた情報発信だけで十分であるとは考えられない。現状の物部川漁協の広報活動は非常に微弱なものと推測される。

漁協が補償金をどのように利用して、現在どのような視点で事業を行っているかを知らせるために流域全体に対する広報拡大が必要となる。

新しい広報媒体の候補の一つとして回覧板を提案する。回覧板は行政が主体となり、各家庭、各集落に必ず配られるからである。ちなみに、昨年筆者の一人が「物部川ウォーキング」のちらしを回覧板に折込みとしてはさんだところ、流域内の高齢者から大きな反響があった。回覧板は、高齢者に対しては、有益な広告媒体であると考えられる。

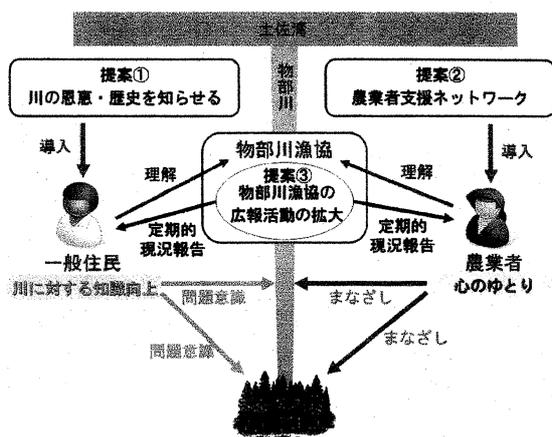


図-3 提案全体のイメージ

また、行政発行の広報誌（香美市の場合は「広報香美」）やJAの広報誌に掲載して頂くなど、各広報誌の読者層の主要な関心テーマを探りつつ、広報活動の拡大を図ることが望ましい。

図-3に、提案全体のイメージを示す。

(4) 林業者支援と行政責任について

今回の調査では、提案に至らなかったが、林業者支援と行政責任について、若干触れておきたい。

高知県は、全国に先駆けて森林環境税を導入し、森林ボランティアの育成や森林保全の啓蒙を図ってきた。また、近年は、多くの企業が県との「協働の森づくり事業」を締結し、間伐などの森林保全活動に参加している。県内において、森林保全への関心は徐々にではあるが確実に高まってきている。

ただし、これらの事業以外にも、林業者を支援する事業の創出と拡充が必要である。

筆者らは、森林整備事業の流域社会に及ぼす効果の計測手法の開発も、その一つであると考えている。

例えば、森林整備の水源涵養効果は、一般的に「取替原価法」で計測されているようである。つまり、ある一定の水源涵養効果を創出するために、通常のダムと比較して、森林整備による「緑のダム」はどの程度経済的かを推定するのである。

厳密に言えば、これは森林整備の効果を計測しているのではなく、その費用を比較しているに過ぎない。効果を一定精度の水準で計測した上で、どの事業を採択すべきかを判断することが望ましい。

今回の聞き取り調査の中で、「川の上流の山々でも水が枯れている」といった声や、中下流域では、「最近、水が溜まっている堰の付近以外は、井戸

を掘っても水が出てこん」といった声が数多く聞かれた。これは、人々の生活の中で、流域の森林の水涵養効果が低下し、鮎だけではなく流域全体が水不足に陥る不安が存在することを示している。今後は、森林整備事業が流域社会に及ぼす効果を計測できる手法を開発し、精度の高い調査を実施して、事業を実施することが必要であると考えられる。

行政には、流域の「全体最適」を図るために、今まで以上に強いリーダーシップを発揮することが求められている。第二章で述べたように、現在国土交通省は、物部川水系河川整備計画を策定中である。高知県でも近々、最近策定した物部川清流保全計画の具現化方策の検討に着手するものと思われる。林野庁も、平成18年9月に100年先を見通した森林づくりを目指した新たな森林・林業基本計画を策定した。これらの整備計画と具現化方策の検討・実現には、関係機関間の利害を調整しつつ、一つにまとめあげていく行政の強いリーダーシップが不可欠であると考えられる。

7. おわりに

1950年（戦後）頃、流域の人々のまなごしは川に注がれていた。しかし物部川総合開発計画と急速な経済成長によって、人々のまなごしは一気に川から遠ざかっていった。林業、農業の生産も縮小している。流域住民の間には、物部川漁協の過去の活動に端を発した不信感が今でも存在している。

図-4は物部川流域を構造物としてみた場合の過去と現在を比較したものである。物部川を柱、川に流れ込む支流を梁、山を基礎と捉えると、過去の流域構造物はしっかりしていたといえる。

高度経済成長期以降、下流域の人々の生活は物質的に豊かになった。建物の外観は立派になったので

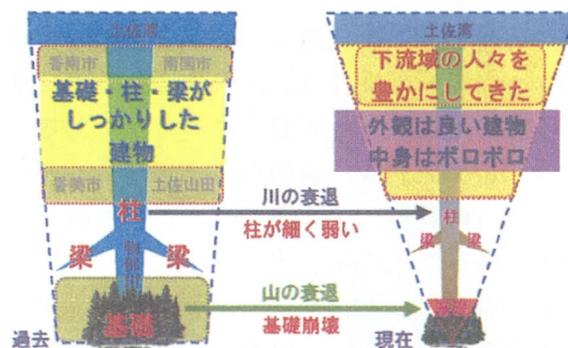


図-4 物部川流域「構造物」の過去と現在

ある。しかし今物部川は、基礎は崩壊寸前で、柱も十分に機能しない脆弱な構造物となってしまった。

近年、建造物の耐震設計問題が話題を呼んだ。この問題は、私たちに自分の家の基礎や柱にまなごしを注ぐことが不可欠であることを教えてくれた。

今、物部川流域の基礎と梁にも、温かいまなごしを向けることが求められている。

【謝辞】

本稿の作成にあたって、多くの方々の親身なご協力・ご助言を賜りました。厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- 1) 物部川漁業協同組合, 物部川—史上最悪の危機の克服をめざして—, 2006.
- 2) 川中麻衣, 川と流域のガバナンスを考える(2) 「物部川方式」を考える, 水をめぐるガバナンス (蔵治光一郎編)第3章, 東信堂, 2008
- 3) 矢作川漁協100年史編集委員会, 環境漁協宣言, 2003
- 4) 土佐山田町, 山田堰 物部川水利史, 1984
- 5) 国土交通省河川局, 物部川水系河川整備基本方針, 2007
- 6) 土佐山田町教育委員会, 土佐山田町史, 1979

A Fundamental Study on Transition of People's Perspectives towards Monobe River

By Hiroki OBATA and Tsunemi WATANABE

Abstract:

Monobe river used to be a perfectly clear class A river with a lot of Ayu. However, it has many problems such as the murky waters and water shortages. The objectives of this paper are to study transition of people's perspectives towards the river and propose some solutions based on study findings.